



留学中の派遣学生の学習状況の振り返りをどのように支援できるか？ : 大福帳に基づく「デジタル月報」の活用

永井, 敦
橋田, 力

(Citation)

大學教育研究, 31:161-174

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481705>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481705>



留学中の派遣学生の学習状況の振り返りをどのように支援できるか？ —大福帳に基づく「デジタル月報」の活用—

How can We Support Students' Reflection on their Learning during Study Abroad?
: Utilizing the “Digital Monthly Report” System based on Shuttle Card

永井 敦 (神戸大学 グローバル教育センター 特命助教)

橋田 力 (神戸大学 グローバル教育センター 准教授)

要旨

本研究は、留学中の派遣学生に対する学習支援の方法として「デジタル月報」という、学びの振り返りを促す新たな仕組みを提案するものである。国内と比べて学習支援を受けにくい環境である留学において、自己調整学習能力が低い学習者は、効果的な海外学習を継続できず、最終的な学習成果も限定的になる可能性がある。よって、学習者が定期的に学習を振り返り、目標志向的な留学生活を送ることを促す仕組みを構築することが効果的である。本稿は、大学の授業評価の分野で開発された、大福帳システムが持つコミュニケーション機能とその効果に着目し、その仕組みを取り込んだ月報という形で、派遣学生の定期的な学習支援を行う方法を考案した。システムの実装には Google Workspace for Education (特に Google Sheets と Google Classroom) を活用した。デジタル月報では、大福帳の機能により、派遣学生と派遣元大学教員のコミュニケーションが促進され、結果として派遣学生の学びの振り返りにつながることが期待される。また、Google Classroom の活用により、提出管理を効率化できる利点がある。

1. 問題の設定

本研究の目的は、留学中の派遣学生の学習の振り返りを支援するための方法として、ICT ツールを用いたコミュニケーションシステムである「デジタル月報」の開発と実装を行うことである。

筆者らは所属大学において、業務の一環として全学協定に基づく交換留学プログラムの運営に携わっている。具体的な業務には、留学説明会の開催、学生の選考、事前学修（危機管理オリエンテーション含む）及び事後学修の実施、などがある。これらは国内大学で国際組織に所属する教員であれば、なじみのある学生派遣関連業務であろう。

しかし、海外派遣教育において、実務者であれば、派遣前（事前）と派遣後（事後）については、研修の提供など、ある程度どのような学生支援を行うべきかの見通しが立つが、派遣中（留学中）の学生支援として何をすべきか（することができるか）については、それほどはっきりしていない。というのも、派遣学生が交換留学に参加している間、現地

で日々接する相手は受入先大学の教職員であり、派遣元大学の教職員ではないからである。ゆえに、派遣学生と派遣元大学の教員の関わりは薄くなりやすく、ともすれば、派遣学生が派遣元大学の教員の顔や名前を忘れていることも珍しくない。

学術的にも、留学の事前学習についての研究（例えば平田, 2020）や事後学習についての研究（例えば高濱愛・田中, 2011, 2012）は比較的容易に見つかるが、派遣中の学習支援に直接焦点を当てた研究は少ない。この中で、カッティング・合田・鈴木（2020）の研究は注目に値する。カッティングらは、学習の「転移」をテーマに、学生の短期海外派遣教育プログラムの事前研修をインストラクショナルデザインの観点に基づき設計した。この研究は、事前研修で扱った異文化適応スキル（同研究で調査のために選ばれたのは「文化について質問する」スキル）が実際に留学先で使われているか、つまり、学習の転移が生じているかどうかを調査するものであった。分析対象の学生は、2 ヶ月（7 週 14 コマ）かけて実施された事前研修の後、現地で 2 ヶ月間の留学中、日々の活動に関するジャーナリングを行い、それを e ポートフォリオとして蓄積した。同研究は、これらの質的データを分析し、実際に学習の転移が生じていることを確認している。カッティング他（2020）の教育実践を、e ポートフォリオにより焦点を当てて分析した Cutting, Goda, & Suzuki (2021) の報告によれば、オンラインシステムに投稿された、派遣学生のジャーナルの記述に対しては、訓練を受けたピアのアドバイザー（前年に当該の留学プログラムに参加した学生）がフィードバックを返す体制になっていたという。これはつまり、派遣学生への留学中の学習支援—学生自身の振り返りにフィードバックを与えることは明確な「学習」支援である—の仕組みであると言え、派遣学生への支援をテーマにする本稿の関心からしても示唆的である。とはいえ、国際教育分野全体で見た時に、派遣学生の留学中の支援について焦点を当てた研究の絶対数は未だに少ないのが現状である。

上述した現状はあるものの、留学した派遣学生が、派遣元大学の教員から支援を受けなかったとしても、十分な学習成果を挙げて帰国してくるならば特に問題は無い。しかし、実際には、派遣学生が留学先大学での学業についていけない、周囲から孤立してメンタルヘルスに影響が出る、あるいは学業に専念するよりも趣味や旅行を優先するなど、様々な問題が生じていることは、留学実務に関わる者にとっては周知の事実である。

筆者らは、これらの問題は、事故や病気などの不測の事態を除いて、「自己調整学習」—「学習者たちが自分たちの目標を達成するために、体系的に方向づけられた認知、感情、行動を自分で始め続ける諸過程」(Zimmerman & Schunk, 2011/2014: 1)—がうまくできていないことに起因していると考えている。自己調整学習、すなわち、目標に基づくプランニング（「予見」）を行い、計画に沿って行動（「遂行」）し、現状をモニタリングしながら、適宜計画や行動について修正（「自己内省」）を加えること、がうまくできない学習者が存在するということである。自己調整学習は、現在の高等教育においても注目されている概念の一つであるが、同概念は留学中の学習にも大きく関わると考えられる。国内キャンパ

スでの学生生活であれば、本人の自己調整学習能力が低い場合でも、母語を共有する教員や友人が周囲にいるため、比較的容易に学習支援を受けることができる。また、学習者は、協働学習に見られるように、仲間との関わりやつながりを通じて、互いに学びを調整し合うことも知られている（「社会的に共有された学習の調整」と呼ばれる）。一方、留学中は、外国人留学生として、学習に関わることの多くを基本的に自分で行うことが一般的である（少なくとも留学の直後は、現地の親しい学友もいないため、この傾向が顕著である）。それゆえ、派遣学生には高い自己調整学習スキルが求められる。その結果、自己調整学習をうまく行うことができない派遣学生は、上述した種類の問題に陥るリスクが高い。したがって、これらの学生に対しては、派遣元大学から何らかの形で支援をすることが必要であろう。今回、自己調整学習の支援方法を考えるにあたって、筆者らは特に「振り返り」の支援が重要であると考えた。なぜなら、目標設定を含めた「予見」フェーズについては、渡航前の事前研修という形で支援をする機会があるため、渡航後に問題が生じるとすれば、それは「遂行」及び「自己内省」であると推測されるからである。また、「遂行」の現状を確認するためには、現状をモニタリングするために振り返りを行う必要があり、ここでも「自己内省」、すなわち、振り返りが重要な役割を持つ。

本稿は、以上の問題意識のもと、派遣学生の留学中の自己調整学習支援の方法として、筆者らの所属大学でこれまで使われてきた、月報による学習管理という方法に着目し、ICTを活用した新しいコミュニケーションツールとしての「デジタル月報」を提案する。

これまでの月報は、派遣学生の学習管理の目的で、留学期間中に毎月提出を求めるものであった。また、その提出も任意であった。具体的には、Excel ファイルで作成された書式に沿って学生が内容を記入した後、メール添付で国際担当事務に送付する仕組みであった。だが、この月報の運用においては、提出された月報に対して教員からのフィードバックが与えられておらず、学生からの一方的な提出だけにとどまっていることから、有効な学習支援になっていないという問題が指摘されていた。もちろん、ここで月報という取組自体を中止し、一から全く新しい学習支援方法を考えるということもできたが、一方で筆者らには、定期的な活動報告を促す月報のシステムは、カッティング他（2020）のフィードバック付きのジャーナリングのように、派遣学生の自己調整学習を促すための良い仕掛けになると思われた。そこで、本稿では、問題は月報を継続するか中止するかではなく、月報のフォーマットをどう設計して、どのように運用するかという方法的及び技術的なものであると捉え直し、最終的に「大福帳」という、授業評価ツールから洞察を得て、新しいシステムを考案するに至った。

以下ではまず、今回の研究の基盤となった大福帳システムについて説明を行い、その後、本稿が派遣学生の学習の振り返りを支援する方法として提案する「デジタル月報」について報告する。

2. 「デジタル月報」による留学中の派遣学生の振り返り支援

2.1 「大福帳」システムとは

本研究での提案の元となった大福帳（出席カード）システムは織田（1991）が開発した。その背景として、織田は大学における学生授業評価を問題視していた。特に、それが学期末に実施される「総括的評価」であることから、そもそも評価を行った学生本人達にとって、その評価情報が次学期以降の授業改善にどのように活用されるかを確認する機会がないことや、総括的な授業評価が毎週の授業の改善にとって「無力である」点を問題としていた（織田, 2006: 323）。これらの問題を解決するために、織田（1991）は総括的授業評価に対して「学期の途中で随時実施する新たな授業評価（形成的授業評価）」（織田, 2006: 323）の視点を打ち出し、その具体的な実践方法として、出席カード機能を持つ大福帳システムを開発した（大福帳を用いた形成的な授業改善プロセスは図 1 を参照）。

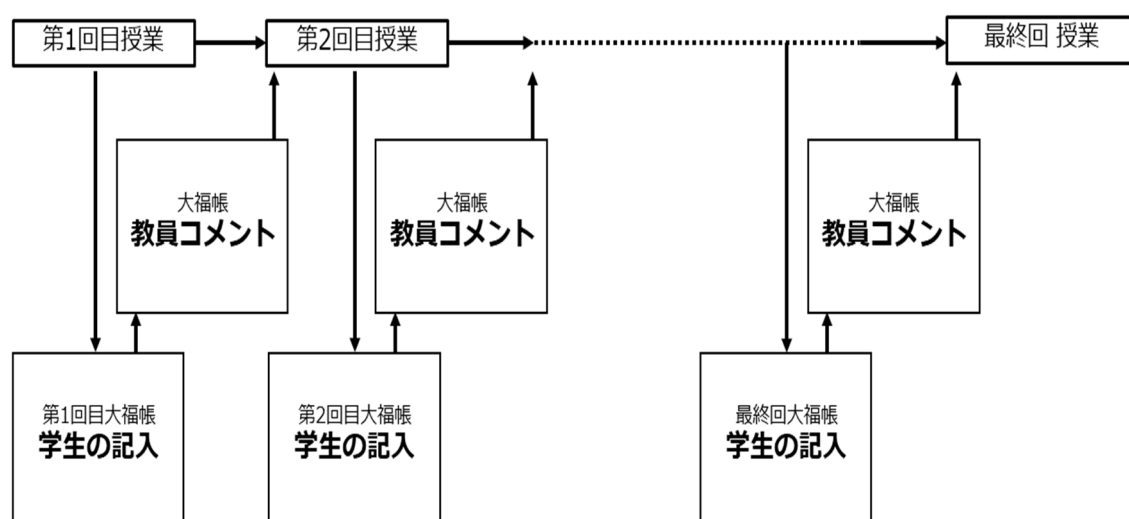


図 1 大福帳を用いた授業改善プロセス（織田（2006：322）に基づき作成）

織田（1991）の開発した大福帳は、(1) 受講生の基本情報（所属、学生番号、氏名等）、(2) 授業実施月日欄、(3) 学生から教師へのコメント欄、そして (4) 教師からのコメント欄、から成る（図 2）。織田の実践では A4 判厚紙に両面印刷したものが使用されている。

大福帳の運用においては、まず、受講生は毎回の授業の最後に、5～10 分程度の時間を使って大福帳の学生コメント欄に記入する。なお、コメント欄には何を書いても良いが、3 行以上書くこと、記述内容自体は成績評価に反映されないこと、代筆は認めないことなどの個別のルールが指定されている（織田, 2006）。教師は、提出された大福帳に書かれた記述を読み、教師コメント欄にコメントを記入するとともに、翌週の授業準備に役立てる。そして、翌週の授業時に大福帳を返却するとともに、授業の冒頭で学生たちが教員からのコメントを読む時間を短く設ける（学生の記述のいくつかを全体に紹介することもある）。これが大福帳活用の一連のプロセスであり、このサイクルは学期中継続される。

199 年度
前期 後期

大福帳

学生と教師をむすび
授業改善をうながす

講師：	授業：	曜日 限	座席 ABCDEFGH
所属（専攻）：		期 番	氏名：
月 / 日	学生から教師へのコメント（授業内容等の意見や疑問）	教師からのコメント	
No.1 /			
No.2 /			
No.3 /			
No.4 /			
No.5 /			
No.6 /			
No.7 /			

図2 大福帳（織田（1996：171）に基づき作成）

織田 (1999: 168-169) は自身の教育実践 (1989 年後期に提供された「教育心理学」科目で受講者は 59 名) と、そこで得られた質的データ (大福帳の効果と問題点についての学生のレポート) に基づき、授業への大福帳導入の効果として以下の 6 つを挙げている:

- 1) 欠席防止効果・授業出席促進効果
- 2) 積極的受講態度の形成効果
- 3) 教師と学生の信頼関係形成効果
- 4) 授業内容理解と学習定着の促進効果
- 5) 自己努力・自己変容の過程の確認効果
- 6) 授業担当者に及ぼす授業内容の充実促進効果

さらに、織田 (1999: 170) は大福帳の最大の長所として、(1) 大福帳の導入に対して受講学生が極めて好意的であること、(2) 授業担当者自身も学生からのコメントをもらうことが授業を行う励みになり、そして、大きな楽しみでもあること、を指摘している。また、織田 (2006) では、3 日間の多人数短期集中講義 (受講者数は 100 名) にも大福帳を導入する試みを行っており、織田 (1999) と同様、大福帳が教師と学生の距離を縮め、学習者の学習意欲や出席意欲を高めるなど、肯定的な効果をもたらしたことを受講者のコメントから確認している。大福帳の効果は別の研究でも支持されており、例えば、向後 (2006) は履修者約 300 人の授業 (教授デザインの概論科目) において大福帳を導入し、出席や学生の授業内容についての振り返り促進の効果があること、また、文章を書く練習にもなっていることを報告している。また、佐藤 (2013) では、142 名の大規模クラス (座学の情報教育科目) で大福帳を導入し、学生の出席意欲が高まり、その結果として学生の興味関心、理解度、授業の満足度が向上したと記述している。

これらの実践をふまえ、近年では、大福帳をオンライン環境で導入する試みがなされており、対面授業と同様に成果を上げている (向後, 2007; 早川, 2017)。向後 (2007) では、履修者が約 60 人の、教授デザインの概論に関する e ラーニング科目において、e ラーニングシステムのコメント機能を活用したオンライン大福帳 (「e 大福帳」) が導入されている。向後によれば、e 大福帳には、他の学生と共有する価値があると判断したコメントを、システム内のオンライン掲示板で簡単に共有でき、学習者コミュニティ内で学びを広げることができるという利点がある¹。また、e 大福帳が学習者と教員・メンターとの個人的なコミュニケーションルートを開くことで、e ラーニング授業の問題点の一つであった「学生が感じる孤独感」の問題を解消する、あるいは軽減する効果を持つと指摘している。また、早川

¹ これは対面授業の場合では、教室全体に向けて特定の学生コメントを紹介するという方法に相当するが、e 大福帳の場合はそれをオンライン掲示板等で簡単に実現できるため、授業時間をさらに有効に活用できる。

(2017) は、e 大福帳に特化したアプリ（「大福帳.js」）の開発と実装を行った。スマートフォンでの使用も想定した優れたユーザーインターフェースデザインに加え、教員からのコメントを LINE で通知する機能や、学生が公開して良いとしたコメントについて匿名化した上でコース受講者全員が Twitter のタイムラインのように閲覧できる機能など、便利で有用な機能が実装されている。また早川は、実際に自身が担当している授業（2016 年の「応用数学 B」で受講者は 70 名及び 2017 年の「情報基礎 A-2」で受講者は 125 名）で大福帳.js を導入したところ、(アプリについて感想を求めなかったにも関わらず) 大福帳.js について受講生から好意的なコメントがあったと述べている。また、所属機関の授業評価アンケートにおいて、同内容の科目について大福帳.js 導入前後（2015 年度と 2016 年度）を比較したところ、「十分な説明を心がけていたか」や「教員の熱意を感じたか」の項目で特に改善が見られたことを報告している。これらの研究は、オンライン環境であっても、大福帳は実際に授業の形成的評価に貢献することを示している。

2.2 「デジタル月報」システム

2.2.1 開発の方針

ここまで、大福帳が授業の形成的評価に明確に貢献することを、先行研究のレビューを行いながら確認してきた。関連する先行研究はいずれも、大福帳を授業運営の文脈で導入したものであるが、本稿は、大福帳の本質は、織田（1991）が元々の問題意識として取り上げたように、「形成的評価」の支援機能にあると考える。したがって、その教育的価値は授業以外の文脈にも応用でき、派遣学生の留学中の学習支援にも、大福帳を活用することは可能であろう。

筆者らの所属大学では、先に言及したように、全学協定に基づく派遣留学生に、留学中の学習管理の一環として、メールによる月報の提出を求めている。だが、この手法には、複数の課題があった。それらは、教員のフィードバックの欠如により、月報が学生からの一方向的な提出にとどまっているという学習支援面での課題（及び一方向的な情報伝達によるコミュニケーション面での課題）と、毎月の月報提出リマインドメール送信の手間や異なるタイミングで提出されてくる月報の管理という管理面での課題である。特に、前者のフィードバックの欠如は、月報が何らかの教育的意図のもとで実施されていたのであれば、致命的な問題であろう。実際、これによって、派遣学生は何のために月報を提出しているのかわからず、月報提出が任意であることと相まって、月報の提出率が低くなることは容易に想像できる²。

これらの課題に対する改善の方向は大きく 2 つある。1 つは、月報に大福帳システムを導入して、派遣学生の学びの振り返り及び教員とのコミュニケーション機能を強化するこ

² 実際、月報提出を継続する学生は、例年、派遣学生全体の 2～3 割であることを国際事務担当者に確認している。

と、そして、もう 1 つは、月報の提出管理を LMS 等の ICT ツールを活用して効率化することである。

上述したように、大福帳は、学びの振り返りを促すだけでなく、教員と学習者が自由度の高い記述内容を基にコミュニケーションを行う場を提供することで、互いの心理的な距離を近づける効果（「信頼関係形成効果」）を持つ（織田, 1991）。一般に、派遣留学生の場合、留学中は派遣元大学の教員との関わりが薄く、互いの心理的な距離は遠くなりがちである。それゆえに、大福帳の信頼関係形成効果は魅力的である。また、向後（2006）が指摘するように、大福帳には学びの振り返りを促進する機能がある。派遣留学生は、異文化環境において日々新たな経験をしているが、経験を学習へと変換するためには、経験学習論が説得的に主張しているように、意識的な振り返りを行う必要がある（中原, 2013）。したがって、留学中の派遣学生の学習支援として、大福帳による振り返りを促すことは効果的であると考えられる。

もう一つの改善点は、LMS を用いた月報のオンライン提出管理の効率化である。著者らの所属機関では Google Workspace for Education が導入されており、構成員であれば無料でサービスを利用できる。そこで今回、そのサービスに含まれる Google Classroom を月報の提出管理に用いることとした。Google Classroom には課題提出機能が備わっており、課題提出についての自動リマインド機能もある。また、学生の月報提出先が一元化されるため、管理の負担が減少する。さらに、Google Classroom 内の投稿機能を使えば、派遣学生全員にアナウンスを行うことも容易で、加えて、Google Meet 機能を用いたビデオ会議を開催することも可能である。このように、Google Workspace for Education の機関アカウントを活用することで、Google Classroom 内の様々な機能だけでなく、Google 社の別アプリ（Gmail、Google Chat、Google Drive など）をシームレスに活用でき、派遣学生の管理及びメンタリングを効率的・効果的に行うことができる³。

2.2.2 デジタル月報の実装

以上の 2 つの方針をふまえ、本稿では、派遣学生の留学中の学習管理の仕組みとして、新たに「デジタル月報」システムを考案し、実装した。デジタル月報の実装にあたっては、Google Classroom との親和性の高さから、Google Sheets（Microsoft Excel と機能的に同じもの）を用いて月報のテンプレートを作成することとした。まず、具体的な成果物として、デジタル月報の全体像を図 3 に示す（ここでは見やすさのために図中のいくつかの箇所に番号を振っているが、実際には、以下で説明する各項目内容が入力されている）。

³ なお、本稿は、デジタル月報の実装において、特定のサービスやアプリを推奨するつもりは無く、今回 Google Workspace for Education を使用することにしたのは、あくまで筆者らの所属機関において、すでに同サービスが導入されていたからにすぎない。

留学月報			
①			
②	③	④	⑤

⑥
⑦
⑧

図3 デジタル月報の様式

まず、図中の左側部分が大福帳システムになっている。①は学習者の情報（氏名、留学先国、所属学部/研究科、留学先大学）を記載する場所であり、その下には、大福帳型の月報スペースが用意されている。月報の記入項目は4つ（図3の②から⑤）からなり、②は（月報を提出する）月を、③は目標の達成状況、学習/研究の進捗、現地での学び、あるいは悩みなどの月報の内容を、④は来月の目標を、そして、⑤は教員コメントを書くスペースとなっている。

今回、デジタル月報というシステムの導入に加え、派遣学生に月報で何を報告してもらうかについても変更を加えている。以下それらについて紹介する。

まず、③において、過去の月報では、報告事項を3項目（学習・研究の進捗状況」「授業外活動の状況」「留学生生活全般を通して得た気づき・学び」）に分け、それぞれ別個にスペースを設けた上で、派遣学生に細かく報告内容を記入させていた。これは、派遣学生に対して書くべきことを明確に指示しているという点で効果的であるが、一方で、毎月最低でも3項目の視点からの報告を求められ、派遣学生の負担が大きい点が課題であった。この点に加え、先述のとおり、月報提出は任意であり、成績評価とも無関係であったことから、負担の大きい月報提出にあえて取り組む学生は限られていた。この現状に対して、筆者らは、デジタル月報の重要な機能は、派遣元大学の教員と派遣学生のコミュニケーションを支えることにあり、そのためには、派遣学生が月報の提出を継続できることが肝心であると考えた。それゆえ、新たな月報システムでは、③で挙げた報告内容の観点（目標の達成状況、学習/研究の進捗、現地での学び、悩み）を参考にしつつも、基本的に自由に書いてよいと指示している（なお、記述の分量の指定はない）。

また、④も今回新たに追加した項目である。何かと慌ただしくなりがちな留学中におい

て、定期的に目標を振り返りながら、自己調整的な生活を送るための意識づけを支援するために、意図的に設置されたものである。この項目により、派遣学生は、前月に設定した目標を振り返りながら（「自己内省」）、来月の学生生活に向けて、プランニング（「予見」）を行うことが可能となる。

次に、図 3 の右側であるが、ここには「留学を通して達成したい目標（専門分野の学習）」、「留学を通して達成したい目標（異文化間能力や語学力）」、「留学を通して達成したい目標（その他）」という 3 つの大目標が表示されている。これらの留学目標は、筆者らの所属大学において、交換留学プログラムに参加する学生全員が提出する書類の中で記入することになっており、その書類自体はこのデジタル月報とは独立したものである。しかし、月報は派遣学生の留学中の学習支援のために実施するものであるため、毎月の月報作成時にも、留学プログラム参加時に設定した目標について意識を向けることができると効果的だろう。それゆえ、留学目標を記入する提出書類及びデジタル月報を一つの Google Sheets 内に組み込むことで、プログラム参加時に設定した留学目標が（Google Sheets の関数を用いて）月報部分に自動的に反映されるようにした。これらの留学目標は、派遣期間全体にわたる長期的な目標と言え、一方で、毎月の月報作成時に記入する「来月の目標」（図 3 の④）は短期的な目標と言える。両者が同じデジタル月報システムの中で一望できることにより、派遣学生は、留学開始前に設定した長期目標及び毎月設定する短期目標の連環について、より自覚的になることが期待される。

そして、このデジタル月報は、先述したように Google Classroom という LMS と連動して運用されることになる。図 4 は、2022 年度の派遣プログラムを対象にした、実際の Google Classroom のページである。Google Classroom では、「ストリーム」（Facebook のタイムラインに似たスペース）において、コンテンツ（記事、ファイル、課題など）を自由に投稿できる。このページには、2022 年の秋に渡航した、交換留学プログラムの参加学生のアカウントが登録されている。この LMS 上において、教員が月報提出の課題を作成することで、登録された学生の Gmail アドレスへ、自動的に通知及びリマインダーが送られる。



図 4 派遣学生用の Google Classroom

2.2.3 デジタル月報の運用

次に、デジタル月報の運用をどのように行うかであるが、この点については東京大学の大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門 (DALT) (2021) を主に参考にした。

デジタル月報運用のプロセスは以下のとおりである。まず、教員が Google Classroom の課題機能を用いて月報提出課題を作成 (初回のみ月報テンプレートを配布)、次に、学生が期日までに Google Classroom の指定の場所に月報ファイルを提出、最後に、教員が個々の学生の月報ファイルに (クラウド上で) アクセスしてコメントを記入した後、当該のファイルを学生にシステム上で返却する。この運用サイクルを学生の派遣期間中は毎月行う⁴。Google Classroom に基づくデジタル月報システムの全体像を図 5 に示す。

Google Classroom でのより具体的な操作方法の解説は上記の文献に任せ、ここでは上記のクラウドに基づいた月報運用の利点を説明しておきたい。これは、Google Classroom でやりとりするファイルはクラウド上のストレージである Google Drive に保存されるという点である。例えば、上述のデジタル月報のテンプレート (Google Sheets) を用いて、学習者が月報を作成して、Google Classroom 上で提出したとする。そうすると、そのファイルは Google

⁴ 大福帳については、(特に大人数授業の場合) 各学生にコメントを返す教員の負担が大きいという課題が指摘されているが、向後 (2007) のようにメンターを活用することも一つの手であろう。本稿では、各学期 30 人前後の派遣留学生を扱うに過ぎず、また、フィードバックを返す際にも、所属組織の海外派遣教育担当教員複数名で分担をしているため、労力の問題はほぼ無い。

Drive 上の特定のフォルダ（学習者と教員がアクセスできる）に自動的に保管される。そして、教員がコメントを返すために Google Classroom の課題採点画面で開いた、その学習者が提出した月報ファイルは、Google Drive 上に保管されているファイルそのものであるため、そこに教員がコメントを書き入れて課題をシステム内で返却した場合、元の Google Drive 内のファイルが上書きされ、学習者に教員のフィードバック付の月報ファイルが返却されることになる。

これが便利であるのは、翌月以降のデジタル月報の作成と提出は、この最初に使用した月報ファイルを用いることで、クラウド上で行うことができる点である。例えば、翌月の月報提出の際には、Google Drive 上の前月分の月報ファイルをクラウド上で開いて、そこに上書きをし、それをそのまま課題ファイルとして提出できる（Google Classroom では課題提出の際に Google Drive からファイルを直接選択することが可能である）。よって、毎回月報ファイルをローカルフォルダに「ダウンロード」して、それを「アプリで開き」、内容を「上書き保存」した後、再度ローカルフォルダから Google Classroom 上の課題提出場所に「アップロード」する、というプロセスが不要になる（ただし、クラウドでの作業に慣れていない場合は、この手順でも実用的には全く問題ないことを付言しておく）。また、クラウドを活用するもう一つの利点として、インターネットと接続したスマートフォンが手元にあれば、隙間時間を活用して Google Drive の月報ファイルにアクセスし、クラウド上で内容を上書きし、そのまま Google Classroom で課題を提出できる点を挙げておきたい。

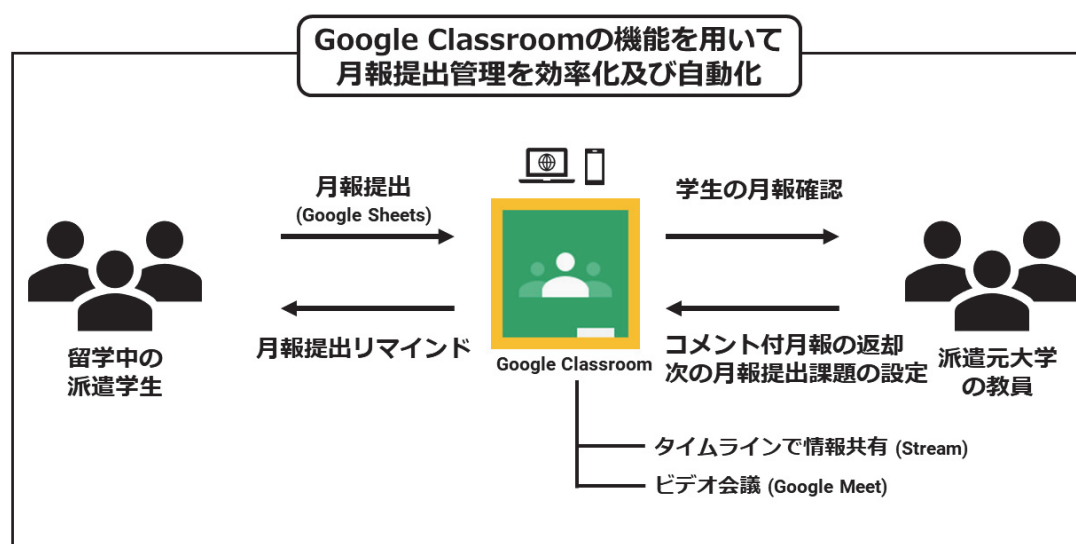


図 5 Google Classroom に基づくデジタル月報システム

3. まとめと今後の課題

本稿は、これまで実践的にも学術的にもあまり注目を集めてこなかった、留学中の派遣学生の自己調整学習（特に「自己内省」フェーズ）を支援する方法として、「デジタル月報」という具体的な手法を提案した。この月報は、大学教育における授業の形成的評価の実践研究から生まれてきた「大福帳」システム（織田,1991）から着想を得たものであった。近年では、大福帳も e 大福帳として、オンライン環境での利用が広がりつつあり（向後,2007; 早川,2017）、DALT のように Google Classroom などの LMS を活用した e 大福帳の実装方法も提案されている。それらの知見に洞察を得つつ、筆者らは派遣学生の学習支援のため、e 大福帳システムに基づくデジタル月報を考案した。デジタル月報自体は Google Sheets としてテンプレートを作成し、その運用には LMS 機能を持つ Google Classroom を用いる形で実装した。このデジタル月報では、先行研究で実証されてきた大福帳の機能により、派遣学生と派遣元大学の教員のコミュニケーションが活性化し、その結果として、派遣学生の学びの振り返りが促進されることが期待されている。また、Google Workspace for Education というサービスを活用することで、月報の提出管理を効率化することが可能となった。

本稿執筆時は、所属大学でデジタル月報を実装し、実際の派遣学生を対象に運用を始めて日が浅いため、意味のある記述データを提示できる段階まで至っていない。だが、ある程度の期間を経て、学生と教員間で月報のやりとりが複数回行われた後、ユーザーである派遣学生の協力のもと、デジタル月報システムについての評価を行う予定である。また、デジタル月報は、大福帳と同様に、実際に教員と派遣学生の間に信頼関係を形成する効果（織田,1991）を生み出すのか、そして、学生の学びの振り返りを効果的に促す（向後,2006）ことにつながるのか、データに基づいて検証する必要がある。これらの重要な問いについて、近い将来、実証データを持って肯定的に答えられることを期待しつつ、本稿を終える。

参考文献

- 織田揮準（1991）「大福帳による授業改善の試み-大福帳効果の分析-」三重大学『三重大学教育学部紀要(教育科学)』第 42 号、pp.165-174.
- 織田揮準（2006）「形成的評価手法(大福帳)を用いた授業改善研究」皇学館大学文学部『皇学館大学文学部紀要』第 44 号、pp.324-300.
- カッティング美紀, 合田美子, 鈴木克明（2020）「留学の事前研修の指導と効果：学びの「転移」の観点から」大学教育学会『大学教育学会誌』第 42 号 1 巻、pp. 95-104.
- 向後千春（2006）「大福帳は授業の何を変えたか」日本教育工学会『日本教育工学会研究報告集』JSET06-5、pp.23-30.
- 向後千春（2007）「e ラーニング授業でコミュニケーションカード「e 大福帳」を使う」日本教育工学会『日本教育工学会研究報告集』JSET07-5、pp.297-300.

- 佐藤貴之 (2013)「大規模なクラスでの大学の情報教育における大福帳を用いた授業の実践とその課題」情報処理学会『情報処理学会研究報告』第 9 号、pp.1-6.
- 高濱愛・田中共子 (2011)「短期交換留学生のリエントリー・ステージにおける課題の分析：逆カルチャーショックと留学活用を中心に」一橋大学大学教育研究開発センター『人文・自然研究』第 5 号、pp.140-157.
- 高濱愛・田中共子 (2012)「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動セッションの記録 (1) 一逆カルチャーショックの諸相を中心に」一橋大学国際教育センター『一橋大学国際教育センター紀要』第 3 号、pp.83-91.
- 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門 (Division for Active Learning and Teaching: DALT) (2021)「オンライン授業で大福帳を使う」<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/tips/almethod/a2804/> (2022 年 11 月 28 日アクセス)
- 中原淳 (2013)「経験学習の理論的系譜と研究動向」労働政策研究・研修機構 (JILPT)『日本労働研究雑誌』第 639 号、pp.4-14.
- 早川美德 (2017)「オンライン版「大福帳」を用いた授業改善」大学 ICT 推進協議会『大学 ICT 推進協議会年次大会論文集』<https://axies.jp/report/publications/papers/papers2017/>
- 平田亜紀 (2020)「海外留学に係る研修内容に関する考察：事前研修、危機管理、支援の実践現場から」愛知淑徳大学論集編集委員会『愛知淑徳大学論集. グローバル・コミュニケーション学部篇』第 4 号、pp.43-50.
- Cutting, M., Goda, Y., and Suzuki, K. (2021). “Analysis of Behaviors Documented in Reflective Journals in Study Abroad ePortfolios to Improve Pre-Departure Training,” *International Journal of Educational Media and Technology*, Vol.15, No.1, pp.117-128.
- Zimmerman, B. J. and Schunk, D. H. (2011). “Self-Regulated Learning and Performance: An Introduction and an Overview,” In Zimmerman, B. J. and Schunk, D. H. (Eds.). *Handbook of Self-Regulation of Learning and Performance*. Routledge, New York (塚野州一訳 (2014)「自己調整学習：序論と外観」塚野州一・伊藤崇達監訳『自己調整学習ハンドブック』北大路書房、pp.1-10)

本論文の作成にあたり、永井が本文の原案作成を行い、橋田が加筆修正を行った。